在天会員記念礼拝説教「天からの響きが聞こえますか？」

日本基督教団石神井教会　2018年10月21日

【旧約聖書】イザヤ書　25章1～9節

1 主よ、あなたはわたしの神、わたしはあなたをあがめ、御名に感謝をささげます。
あなたは驚くべき計画を成就された、遠い昔からの揺るぎない真実をもって。
2 あなたは都を石塚とし、城壁のある町を瓦礫の山とし、
異邦人の館を都から取り去られた。
永久に都が建て直されることはないであろう。
3 それゆえ、強い民もあなたを敬い、暴虐な国々の都でも人々はあなたを恐れる。

4 まことに、あなたは弱い者の砦、苦難に遭う貧しい者の砦、豪雨を逃れる避け所
暑さを避ける陰となられる。
暴虐な者の勢いは壁をたたく豪雨
5 乾ききった地の暑さのようだ。
あなたは雲の陰が暑さを和らげるように、異邦人の騒ぎを鎮め
暴虐な者たちの歌声を低くされる。

6 万軍の主はこの山で祝宴を開き、すべての民に良い肉と古い酒を供される。
それは脂肪に富む良い肉とえり抜きの酒。
7 主はこの山で、すべての民の顔を包んでいた布と、すべての国を覆っていた布を滅ぼし
8 死を永久に滅ぼしてくださる。
主なる神は、すべての顔から涙をぬぐい
御自分の民の恥を、地上からぬぐい去ってくださる。
これは主が語られたことである。
9 その日には、人は言う。
見よ、この方こそわたしたちの神。わたしたちは待ち望んでいた。
この方がわたしたちを救ってくださる。この方こそわたしたちが待ち望んでいた主。
その救いを祝って喜び躍ろう。

【新約聖書】ヨハネの黙示録　7章9～17節

9この後、わたしが見ていると、見よ、あらゆる国民、種族、民族、言葉の違う民の中から集まった、だれにも数えきれないほどの大群衆が、白い衣を身に着け、手になつめやしの枝を持ち、玉座の前と小羊の前に立って、10大声でこう叫んだ。
「救いは、玉座に座っておられるわたしたちの神と、小羊とのものである。」
11また、天使たちは皆、玉座、長老たち、そして四つの生き物を囲んで立っていたが、玉座の前にひれ伏し、神を礼拝して、12こう言った。
「アーメン。賛美、栄光、知恵、感謝、誉れ、力、威力が、
世々限りなくわたしたちの神にありますように、アーメン。」
13すると、長老の一人がわたしに問いかけた。「この白い衣を着た者たちは、だれか。また、どこから来たのか。」14そこで、わたしが、「わたしの主よ、それはあなたの方がご存じです」と答えると、長老はまた、わたしに言った。「彼らは大きな苦難を通って来た者で、その衣を小羊の血で洗って白くしたのである。
15 それゆえ、彼らは神の玉座の前にいて、昼も夜もその神殿で神に仕える。
玉座に座っておられる方が、この者たちの上に幕屋を張る。
16 彼らは、もはや飢えることも渇くこともなく、
太陽も、どのような暑さも、彼らを襲うことはない。
17 玉座の中央におられる小羊が彼らの牧者となり、命の水の泉へ導き、
神が彼らの目から涙をことごとくぬぐわれるからである。」

数えきれないほどの大群衆が…

今年も「在天会員記念礼拝」に皆さんをご案内することが許されました。この機会に、新しく更新された「石神井教会在天会員・教会墓地埋葬者名簿」をお届けしています。この一年の間に８人の方のお名前が加えられた名簿です。

この８人のうち５人は、この礼拝堂で葬送の式を執り行わせていただいた方々です。地上で用いられた肉体をもって最後の礼拝を、教会生活を共に過ごした信仰の友らと共に守っていただくことを通して、わたしたちは、亡くなられた方を神の御手にお委ねしたのです。

もちろん、たとえ教会で葬送の式を執り行わなかったとしても、わたしたちの祈りは同じです。ここで日曜日ごとにあずかる礼拝を重ねながら、わたしたちは、確かめているのです。自分たちも皆いずれ、地上の歩みを終えて、自分の手では何も為すことのできない者となって、もちろん、家族や医師の手によってさえ何も為すことのできない状態になることを。そして、ただ、わたしたちを貴い一人ひとりとして造り、存在させてくださったお方である神の御手にお委ねするしかないときを迎えることを。そうであればこそ、わたしたちは、どのような葬送がなされた方であっても同じように、一年に一度の在天会員記念礼拝でその名を憶え、この一人ひとりを神の御手にお委ねする祈りを新たにいたすのです。

今、皆さんも、ここに名の記された方々のことを思い起こしてくださっていることでしょう。ことに、新たに加えられた方々のことに、わたしたちの思いは強く向かわされます。皆、最期の日々を共に歩ませていただいた方々です。実際にどれほど親密な交わりの中で共に歩ませていただいたかは、さまざまかもしれません。ご本人も、周囲のご家族も、またわたしどもも、死期をはっきりと自覚して、そのときを迎えた方もありました。ご本人やご家族はそうであっても、わたしどもにはいささか突然のことのように受けとめることになった方もありました。あるいは、ご家族やご本人さえ、そのときを唐突に迎えることになった方もあるのかもしれません。そのときをよい備えをもって迎えることを、わたしたちは願いますが、思い通りにはならないことも少なくないのです。

そのことに思い至ることができるならば、わたしたちは、もう一歩思いを進めて、ここには名の記されていない方々のことも、思い起こしたいのです。今夏多発した自然災害で亡くなられたような方々のことはもちろんです。もっと身近な、わたしたち自身の周囲にも、多くの死の現実がありました。教会員の皆さんの中に、この一年で大切なご家族の死に接した方が幾人いらっしゃるでしょうか。あまりに突然の訃報に驚かされたこともありました。そのような方々のことも、わたしは、この名簿に名を記された方々と等しく、祈りに憶えたいのです。

ヨハネの黙示録に描かれているのは、天上の礼拝の様子です。弟子のヨハネが、幻の中で見たのです。そこには、数えきれないほどの大群衆がいます。あらゆる国民、種族、民族、言葉の違う民。何の分け隔てもありません。皆、地上の生涯を終えた者たちです。地上の歩みで被った苦しみはもはや取り去られ、すべての者たちが、等しく神の御座に近づき、讃美を歌っているのです。

ヨハネが見た幻

これは、弟子のヨハネが幻で見た様子だと言いました。けれども、それだからと言って、どうか、これを荒唐無稽な戯言だと思わないでいただきたいのです。ヨハネがこのような幻を見たと報告しているのは、実のところ、この幻のようなことがすでに地上の営みの中で始まっていると理解していたからなのです。

ヨハネがどのような特別な人であったとしても、地上を生きている者が、天上の様子を本当の意味で完全に知ることはできないでしょう。

もちろん、地上と天上というのは、古代人の表現に従ってのことですから、飛行機に乗って大空高く飛び、ロケットに乗って宇宙にまで飛び出すことができる現代人の感覚での地上と天上とは、意味が違うのです。聖書の世界で、地上とは人が生きる領域のことであり、天上とは人の手の及ばない神の領域のことである、と言ったらよいでしょう。ですから、聖書の世界の人々は、元来、人が死んだら天に行くとも考えることはできませんでした。人は死んだら地上の土の塵に帰る、と考えたのです。死んだ人が天に上げられるというのは、古い時代の聖書の世界の人々にとっては、例外中の例外でしかないのです。旧約聖書で、死んで天に上げられたと言われている人物は二人しかいません。天は、人が、たとえ死んだ後であっても入り込める領域ではない、と考えられていたのです。そこは、神の領域だからです。神の領域である天上のことを、地上に生きる人間が知ることも、見ることも、入ることも、決してできない、というのです。

それでも、わたしたちは、地上にあってなお、天上の出来事に触れることが無いとは言えません。地上の出来事であっても、わたしたちには、理解が及ばないようなことが含まれることを知っているのです。「死」ということも、その一つかもしれません。生物としての「死」のことは、現代人でなくても、古代人でもよく分かっていました。生物としての人間は、「死」のときが訪れれば、確かに土の塵に帰るのです。けれども、わたしたちが実際に経験する「死」は、それだけのことでしょうか。土の塵に帰っておしまい、でしょうか。それでおしまいにならない何かが、そこで起こっているのではないでしょうか。そうでなかったら、どうして、わたしたちは、すでに土の塵に帰ってしまった人のことを思い起こし、涙を流し、その存在を忘れずにい続けるのでしょうか。

ヨハネが天上の幻を見たと言ったとき、ヨハネの実際の目には、地上で起こっている不思議な出来事が映っていたのかもしれません。あらゆる違いのある多くの人々が一つ所に集まって来て、神を中心とする礼拝を始めている、という出来事です。それは、ヨハネの時代には考えられないようなことでした。その時代に、神は、それぞれの民族のものでした。あるいは、すべての者を同質の者として統合するのが、神でした。違いのある者たちがそのままで、一つの神のもとに集まる、ということは、考えられないことでした。ところが、ヨハネは、そのような人々の集まりを、すでに見ていたのです。キリストを信じる者たちの教会です。そこには、あらゆる違いのある人々が、違いをそのままに共に集まって来ていたのです。ただ、神が「白い衣」を着させてくださることを信じて、です。

天上の讃美に声をあわせて

「白い衣」というのは、ヨハネの時代の教会で信者となる洗礼を受けたときに着させてもらった真新しい衣のことです。洗礼も「白い衣」も、人の地上の営みとして為されたのではなく、神が為してくださる天上の出来事と信じて営まれました。キリストを信じた人たちの教会は、地上で神の為してくださる天上の出来事を見ることを祈り求めて生きた人たちでした。わたしたちの教会も同じです。

もちろん、ヨハネが実際に見ていた教会は、小さな集まりだったでしょう。大群衆とは言い難い、すぐに数え終わってしまうような者たちの集まりです。それでも、その中に、地上の常識とは考えられない、天上の出来事の片鱗としか思えないことが、起こっていたのです。

神が地上の出来事の中に入り込んできて為してくださる御業がある。それは、天を仰ぎ、神に思いを向けることに集中するならば、見ることのできる御業です。わたしたちの常識が知っている地上の事柄だけでは完結しない、神の御業と結び付けられて、天上の営みの中でこそ完成する世界こそが、実は、わたしたちの生きている世界の姿なのだ。そう、ヨハネは、天上で見たという幻を語ることによって教えているのです。

そうであればこそ、わたしたちは、今や物事を逆転させて見ることができるのです。わたしたちが天を仰ぎ、神に思いを向けて為さんとしている営みは、すでに天上で営まれている出来事であるときにこそ、事実為し得るのだ、と。わたしたちが地上で神を礼拝する営みは、天上で神を礼拝する大きな営みがすでにあるからこそ為し得るのだ、と。

そこには、神を礼拝する大群衆がいると、ヨハネは語りました。わたしたちが「土の塵に帰るだけ」だと考えていた死者たちが皆、そこにいるからです。地上の生涯の歩みの中で、苦しみ、疲れ、打ちひしがれ、弱り、倒れるばかりであった者たちが皆、天上で神を礼拝する者となっているのです。それは、「死んだ後に行った死後の世界は、天国でした」ということではありません。あの、歩みを重ねる中で目から涙のこぼれない日はなかったかもしれない地上の日々が、すでに神の御業の中にあった、ということなのです。地上でわたしたちが為すいかなることも、神の御業の中にあって、天上で覚えられるべきこと、涙がぬぐわれ、喜びが与えられること、なのです。

わたしたちは、すでに地上の歩みを終えた、愛する者たちのことを思い起こし、記念いたします。天を仰いで、神を礼拝することを通して、記念いたします。先達の地上で為したことはすべて、神の御業のうちにあって、今や、天上の営みとして完成させられようとしているからです。その、先達の加えられた天上の営みこそが、地上のわたしたちの営みの行くべき道をも示してくれるのです。

そうです。わたしたちが地上で神を讃美して歌うとき、わたしたちの耳には、天上で神を讃美して歌う大群衆の大合唱の響きが、聞こえているのではないでしょうか。そのとき、わたしたちの間には、もはや地上も天上もなく、もはや死もなく、地上で流した涙は必ずぬぐわれるでしょう。